



貝のようで貝でない、漂う生物

-エボシガイ-

啓蟄を過ぎ、虫だけでなく人にとっても外に出ると気持ちのよい季節になりました。こんな時は、散歩がてら浜を歩いてみると、色々と面白いものを発見することがあります。先日、クシバルに行った時のことですが、何やら二枚貝のようなものがたくさん張り付いたブイが打ち上げられているのを見つけました。この二枚貝のようなもの、大きいもので3cmくらいの、白い貝殻のような生物です。よく見ると、その根元は弾力のある柄状になっており、これでブイにくっついているようです。打ち上げられてから時間がたつと死んでしまいますが、打ち上げられて間もない場合、海水に戻すと、殻の端から毛のような物を出したり引っ込めたりし始めます。この生き物はエボシガイと言って、姿が二枚貝にそっくりなことから“カイ”という名が付いていますが、実は、貝とは全く異なった生き物で、海岸の岩などにくっついて生活しているフジツボと同じ仲間なのです。

今回はこの貝のようで貝でない生き物、エボシガイのお話をしましょう。

海岸で拾ったものを持ち帰って調べてみると、エボシガイとそれによく似たカルエボシの2種類のエボシガイ類がいるようです。これらは、親から産まれた浮遊幼生が流木などの漂流物にくっついて成長し、その漂流物と共に一生海を漂って生活します。クシバルで見つけたものは、潮流と冬の季節風のせいで打ち上げられたものでしょう。さらに調べるため再びクシバルで探してみると、あるわあるわ、ブイや木片、木材、空き瓶、そしてビーチサンダルなど色々な物にくっつき、打ち上げられたたくさんのエボシガイが見つかりました。これら漂着物の内で最もびっしりと付いていた物は木材で、7cm四方に324個体、つまり1cm²当たり6.6個体が生息していました。そして、これらの殻の大きさには、1.8~13.4mmと大きな差がありました。この差はどうして生まれたのでしょうか。一度に付いたのではないから、とも考えられますが、そうとも限らないのです。先程、殻の端から毛のような物を出したり引っ込めたりすると言いましたが、これは本当は「蔓脚(まんきやく)」と呼ばれるものです。あし(脚)と言う

と妙に聞こえますが、実はエボシガイやフジツボは、節足動物甲殻類、つまりエビやカニと同じ仲間なのです。物にくっついているため、移動に使われなくなった脚の部分が、この蔓脚です。エボシガイやフジツボは、この蔓脚を動かして、海中のプランクトンなどを捕まえて餌にしています。このような摂食方法ですから、もともと同じ大きさでも、うまく餌を捕まえたものはどんどん大きくなり、すぐそばのものはその陰になるため、ますます餌が捕れなくなります。その結果、それらの間に大きなサイズの差が生まれても不思議ではありません。中には、一つの個体の殻の上に別の個体がついているものも見られましたが、これらは、先の一つがいて、その後、別の機会に新しい個体がくっついたのだと思われます。

漂流物はプランクトンとともに、潮目に集まることが多いですから、エボシガイは、漂流物にくっつくことによって、餌となるプランクトンにありついているものと思われます。その途中で、運悪く浜に打ち上げられてしまったエボシガイたちは、かわいそうな気もしますが、そのいくらかは陸上の生物に食べられるなどして、その栄養となります。こうして打ち上げられたエボシガイは、海から陸への栄養の架け橋になっているのではないのでしょうか。

阿嘉島の海より

-暖冬・多雨-

今年の冬は暖かくて、雨が多いですね。沖縄气象台によると、エルニーニョ現象の影響で、今冬(12~2月)沖縄県内の気温と雨量が戦後最高値を記録したそうです。アムスルでは設立当初より、毎朝10時に気象・海象の観測をしていますが、阿嘉島での今冬の平均値を過去の平均値と比較してみると、気温は20.30(88~97年は19.39)、水温は22.81(88~97年は21.64℃)、雨量は532mm(92~96年は286mm)と、過去の平均値よりも、気温と水温はおよそ1度高く、雨量は2倍近くもありました。冬の高水温は海の生物の生態に影響を与えるかもしれません。また、阿嘉島では現在たくさんの公共工事が行われていますが、この雨によって陸上の泥が海に流出しないか心配されます。水が濁ったり泥が堆積したりすると、沖縄本島で赤土が流出したサンゴ礁のように、サンゴが死んでしまうかもしれないからです。

